

【レジュメ】

バルザックにおける「深淵」、「狂人」、「学者」の寓意

(『仏文研究』15号、1985年2月、pp. 71-99)

村田京子

バルザックの作品中に多く見られる「深淵 (abîme)」という言葉は、象徴的な意味を担っている。それは人間の心の中の動物的な衝動と結びついていると同時に、人間を超越した霊的存在をも意味する。例えば『セラフィタ』冒頭部には、登場人物の一人、ミンナを飲み込もうとする破壊的な「深淵」が描写されているが、それは「深淵」を覗き込んだ彼女の暗い情動が投影されたものとも考えられる。それに対し、この「負の深淵」に対峙する天使的な存在セラフィトゥスも「深淵」と呼ばれており、天上、永遠の至福を象徴する「高次の深淵」も存在している。このような相矛盾する性質を持つ「深淵」は、人の心の無意識 (ユングの分析心理学用語を借りれば「集合的無意識」) を指しているように思える。すなわち、「深淵」とはバルザックにおいて、人間の心の内的領域であり、自己の無意識内容を意識化しなければ、それは破壊的に働き、意識化すれば創造的に働くものである。

『人間喜劇』の様々な登場人物が「深淵」に対して臨む態度は、客観的立場を取る「学者 (savant)」と、主観的に関わっていく「狂人 (fou)」の二つに還元される。心理的に言えば「学者」は日常的意識の側に、「狂人」は日常的意識を越えた世界の側にあって神秘的体験を持つ者である。「狂人」のカテゴリーには、①宗教 ②芸術 ③愛 に生きる人々が属する。これらの者は皆、深い洞察力、想像力を獲得するが、一方で無意識から立ち現われる心像があまりに強烈なため、その魔術めいた力に引きずり込まれ、日常的な正気の世界に帰る道を永遠に失う危険性がある。芸術家小説『ガンバラ』や『知られざる傑作』などにおける悲劇は、まさに創造的なものに潜む危険が露呈されたものである。

ところで、作者のバルザック自身は「学者」と「狂人」のどちらのカテゴリーに属していたのだろうか。実は、彼は両者の要素を兼ね備えていた。「学者」の要素は華々しい浪費生活、立身出世を望んだ彼の生きざまに見られるが、創作活動においては「狂人」の側にあった。創作に没頭するバルザックにとって、空間も時間も存在せず、心の深層から立ち現われる豊かなイメージを意識に浮かび上がらせ、宇宙と一体になる。しかし、こうした瞬間は狂気の不安も感じさせ、実際、彼は発狂の恐怖に襲われることがしばしばであった。それゆえ、バルザックの取った態度は、「深淵」に落ちていく「狂人」に共鳴しながらも、「深淵」の縁に留まっておこうとする「学者」の立場にあった。